
赤き英雄の復活

栗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤き英雄の復活

【Nコード】

N7881Z

【作者名】

栗

【あらすじ】

マスター・アルバートのモデルVによる世界改変は二人のロックマンによって防がれ、世界に平和が舞い戻った。しかしそれは長くも続かず、マスター・トーマスが本性を現す。『ガーディアン』に所属するエールは再びの世界の危機に奮闘する。そして彼女は一体のレプリロイドと出会うことになる。約五年前に死んだジルウェに似た風貌のレプリロイドの名は……ゼロ。

プロローグ

科学技術が発達した未来。

世界は人間と人間が作り出した機械生命体『レプリロイド』と長き戦争を終えて、共存の道を進んでいた。

戦後、『三賢人』を頂点とした連合政府『レギオンズ』は人間を機械の体に、レプリロイドには寿命を設定する法律を定め、互いの距離を縮め、平等で平和な世界が到来していた。

しかし、世界には幾多の危機が訪れた。

中でも一昨日おととい巻き起こった事件は『三賢人』の一人であるマスター・アルバートが起こしたという『レギオンズ』の信頼を格段に失うものであった。

『三賢人』は名を『二賢人』と改め、信頼を取り戻すため、マスター・トーマス、マスター・ミハイルはレギオンズ本部でこれからについて話し合うために集まっていた。

2

「……天と地を定め、新たな命を生み出す神となる、か」

「最後のミッションレポートか。アルバートめ、随分と大それたことを言ったもんだ」

マスター・ミハイルはハンターから届いたミッションレポートを思い出しながら、呟いた。

するとミハイル同様『二賢人』であるマスター・トーマスは席を立ち上がりながら、

「ミハイル……君は我等が新たな命を生み出すなどおこがましいと思うかね？」

「馬鹿な事を……トーマス、お前さんでもそんな妄想を抱くことが

あるのかね」

トーマスはミハイルに背を向けるようにして歩き始めた。

「……人間とレプリロイドを平等にするための法律があるだろうか？
……覚えているか？ あれが決めたのはアルバートとこの私が
賛成したからだ」

「な、何が言いたい……？」

トーマスは振り返り、

「人間に機械の体を与え、レプリロイドに寿命を設定する」

では、とトーマスは一度言葉を切り、

「機械と入れ替わったオリジナルの人間の肉体は何処にあると思う？
寿命を設定する前のオリジナルのレプリロイドのデータは何処にあると思う？」

言い終える同時、トーマスとミハイルの間を埋めるかのように四人の影が出現した。

それはそれぞれがライブメタルを持った適合者達である。

彼等はアルバート駆逐のミッション時に消息不明となった筈だ。

だが彼等はここに居る。

ミハイルは眼を見開き、

「トーマス……、貴様……！」

「アルバートは間違っていた。だから私達もハンター達に力を貸した」

トーマスは軽く息を吐きながら、

「だが……奴の言葉にも、一つだけ、一つだけ正しかった事がある」

「この世界はリセットしなければならない」

ブローグ（後書き）

要はロックマンZXAのマニアモードクリア後に見れるエンディングですね。

1話 束の間の平和

一昨日の事件は見事解決に導かれたものの、機械生命体イレギュラーの出没が減少することはなかった。

相変わらず数百年前の貴重な技術、『ロストテクノロジー』が埋まった遺跡にはイレギュラーの確認がされていた。

そのため人々を脅かすイレギュラーの駆逐を仕事としている組織があった。

名を『ガーディアン』。

「やあっ！」

青い姿をした少女がイレギュラーの頭を吹き飛ばした。

彼女の名前はエール、『ガーディアン』の一人である。

彼女はロックバスターでイレギュラーの胸部を貫きながら、

「モデルX、これで何体目？」

『十二体目！ 上々じゃないか』

モデルXの声は聴覚を使うというよりは、頭に直接響いているといったほうが合っているかも知れない。

何しろ彼はエールと一つとなっているのだから。

一体のイレギュラーがエールに向けて弾を撃ってきた。

彼女はこれを跳ぶことで交わし、そのイレギュラーに向けてロックバスターを放つ。

《エール！ イレギュラー反応が遺跡に戻っていくわ！ エールはそのままガーディアンベースに帰還して！》

美しい女の声はエールの耳元で響く。
遠方からの通信が入っているのだ。

エールは素直に疑問に思ったことを問う。

「どうして？ 追わないの？」

《このまま追ってもキリがない。遺跡に入ってもっと強力なイレギュラーが居たら大変でしょ？》

エールは首を縦に振り、しかし癢なのでイレギュラーを数体をロックバスターで貫いてから、その場で動きを止める。

《座標確認……………転送！》

エールはその場で粒子に包まれ、姿を消した。

「ぶはあ！ 任務ミッションの後に飲む牛乳はサイコーだー！」

そう叫んだのは先程まで任務ミッションでイレギュラーを相手にしていたエールだ。

彼女の姿は先程とは違い、黒のタイツを上下半身着込み、その上に白の短パンに青いヘソ出しのコート。

長い髪を後ろで括った女っぱさが出た姿をしていた。

『こう見ると君は女の子っぱいよね』

「モデルX、私は女だよ……」

彼女はそう返答しながら牛乳を冷蔵庫に片し、『ガーディアン』の本部である『ガーディアンベース』内部を歩いていく。

『ガーディアンベース』は空飛ぶ本部であり、今現在も空を飛んでいる。

エールも最初はそれに慣れず酔ったものだ、だが今では何事もなく生活できる。

いやはや慣れつつ凄いなあ、とエールは思いながらある部屋に入ろうと扉に触れた。

するとその扉は突然、役目を思い出したように自動的に開いた。

扉の奥に広がっていたのは様々な機械が置かれ、数十人にも及ぶ人が座った場所だった。

そこは『ガーディアンベース』の操縦をする場所でもあり、司令室でもある部屋だ。

その司令室で彼女を待っていたかのように立っている全身ピンクの金髪の少女。

彼女の名はプレリー、こう見えても『ガーディアン』を統治する司令官である。

彼女はエールの姿を確認すると、

「エール、お疲れ様」

その美しい声はエールが任務時に聞いた声である。

エールは微笑を浮かべながら、

「只今、エールが無事任務から帰還しました！」

と、120%冗談で叫んだ。

クスクス、とプレリーは口元を押さえながら、

「ええ、お帰りなさい」

と、返答した。

エールは満面の笑みを浮かべ、後頭部を掻く。

『やれやれ、とても18の女の子には思えないなあ……』

その声はエールの腰のポーチから聞こえた。

エールはそのポーチを開けて、掌に収まるほどの大きさの青い金属を取り出すと、

「もー、うるさいなあ。それでも色々成長してるんだよ」

『ハハハッ、それは体の成長だろう？ 頭はどうなんだい？』

ポカポカ、と二人(?)は喧嘩を始めた。

それをプレリーは止めようと、間に割って入ろうとする。とてもとても平和な時間が過ぎていく。

だが、そんな時間はそう続かない。

司令室のモニターに外部からの通信が入った音がした。

プレリーはそれを受け取ると、外部と通信を繋げた。

そのモニターに映されたのは『三賢人』改め『二賢人』の一人、マスター・ミハイルの顔だった。

プレリーは顔を困惑させながら、

「こちら『ガーディアン』司令官プレリーですが、マスター・ミハイル、どうしたのですか？」

するとミハイルは歯を食いしばり、悔しそうな顔をしながら、

《やられた！ トーマスは『レギオンズ』を裏切りおった！》

その場に居る者は思考が固まった、冗談を言っているのかと思った。だがミハイルは本当に焦っているかのように、

《トーマスはライブメタルH、L、F、Pの適合者と共に逃走中！
急いで解析、終え次第追ってくれ！！》

「適合者……、ウロボロスでモデルZがどうにかした筈なのに……
！」

エールは悔しそうに呟き、プレリーはミハイルとの通信を切り、

「……どうやら、また行ってもらわなくちゃいけなくなったわね」

と、プレリーは申し訳なさそうにエールを見た。

当のエールは自信満々の笑みを浮かべながら、首を縦に振った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7881z/>

赤き英雄の復活

2011年12月25日12時51分発行